

月夜野型羽釜の生産と流通

—— 地域限定流通の背景 ——

桜 岡 正 信

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. 月夜野古窯跡群の概要 | 5. 武蔵型甕の生産と流通 |
| 2. 月夜野型羽釜の成立と系譜 | 6. 狭域流通の背景 |
| 3. 月夜野型羽釜の生産と供給 | 7. まとめ |
| 4. 小地域圏の形成 | |

—— 論文要旨 ——

羽釜は、9世紀代まで煮炊具の主体であった土師器の武蔵型甕に代わって、9世紀末から10世紀初頭に成立する上野地域を代表する、基本的には須恵器系の煮炊具である。広域において斉一性の強い武蔵型甕とは対照的に、羽釜は上野地域だけでもその器形・整形などの特徴にバラエティがあることから、幾つかの「型」が設定されている。上野南部には西毛地域を中心として「吉井型」「乗附型」(木津 1990)が、北部地域には「月夜野型」(中沢 1984)が分布している。また、南部の東毛地域には、実態が判然としないが月夜野型とも吉井型とも違う要素を持つ「東毛型」の存在が予測される¹⁾。

これらの羽釜相互の関係は、吉井型羽釜と月夜野型羽釜は、時間的には併行するが生産地と消費地を異にする地域差として捉えられているが、吉井型羽釜と乗附型羽釜・東毛型羽釜との関係は、地域差が時間差か未だ判然としていない²⁾。こうした混沌とした南部地域の羽釜と比較すると、月夜野型羽釜は器形・整形が独特で時間的な形態変化もある程度把握され、月夜野古窯跡群という限定された窯跡での生産と北部地域限定の分布が想定できることから、その流通圏の把握と流通システムが解明できる可能性を秘めている。

土器流通圏の形成とそのシステムについては、古墳時代の土器流通モデルが先学諸氏によって提示されているが、その多くが儀礼祭祀の場で使われる坏を対象としたものであり、日常生活に密着した煮炊具にそのまま当てはめられるとは考えにくい。まして、律令体制の確立によって変革された社会の中で出現する、月夜野型羽釜の狭域流通を説明するにあたって、古墳時代に想定されている流通システムをそのまま援用してよいものか即断できない。

そこで、ここでは羽釜の中でも月夜野型羽釜という地域限定羽釜を素材として取り上げ、その成立過程と系譜、生産と供給それぞれを先学の研究を参考にしながら再検討し、そこから地域圏形成の過程と背景を考える。そしてこの地域圏形成の意味と土器生産・流通との密接な関係を示し、古代の土器生産・流通システム解明への布石としたい。

キーワード

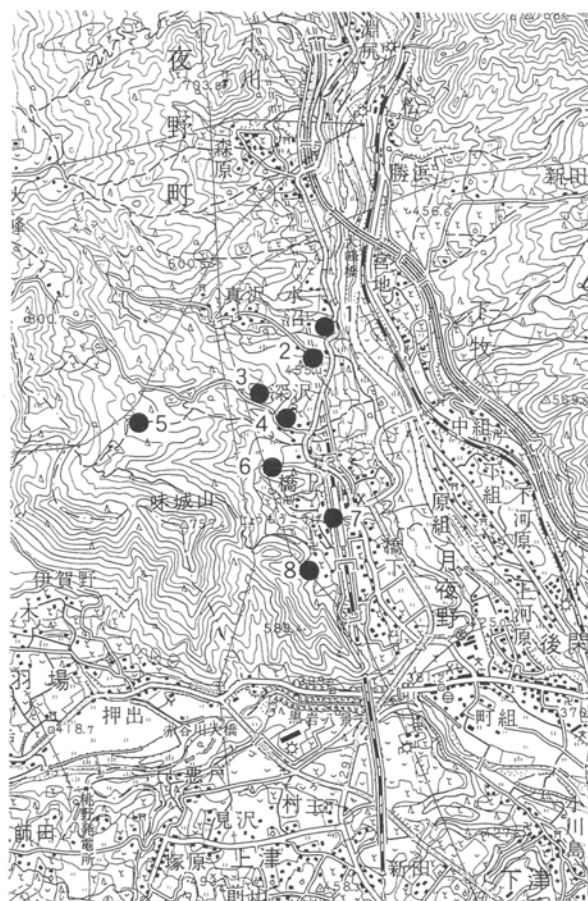
対象時代 平安時代
対象地域 群馬県及び隣接県
研究対象 月夜野型羽釜・吉井型羽釜・東毛型羽釜・武蔵型甕・ロクロ甕・地域限定流通(狭域流通)・広域流通

1. 月夜野古窯跡群の概要（第1図）

月夜野古窯跡群は、大峰山から伸びる丘陵を利用した窯跡群であり、利根川と赤谷川合流点より上流側の利根川右岸の比較的狭い範囲に立地している（第1図）。これまでに山崎義男氏（山崎 1941）や井上唯雄氏（井上 1973）によって調査が行われ、その後、大江正行・中沢 悟両氏によって研究が進められてきた（大江・中沢 1985）。その結果、洞A、沢入A、深沢B・C、須磨野A、真沢A、水沼Aの7支群で窯体の存在が確認され、出土遺物が紹介されてきた。また、上越新幹線工事に伴って調査された藪田遺跡では、粘土採掘坑を始めとして須恵器工人の存在を示す資料が確認されており、近くに藪田A支群が想定されている。これらの窯跡群は、立地基盤の違いから大きく2群に捉えなおすことができる。それは、石英安山岩質凝灰岩地帯に立地する須磨野A、深沢B・C、水沼A、真沢A各支群と、緑色凝灰岩地帯に立地する沢入A、藪田A、洞A各支群である。各窯跡群の概要については、『月夜野古窯跡群』（大江・中沢 1985）に詳しいが、各支群の生産時期の関係について藪田遺跡などの検討事項を併せて、簡潔にまとめておきたい。

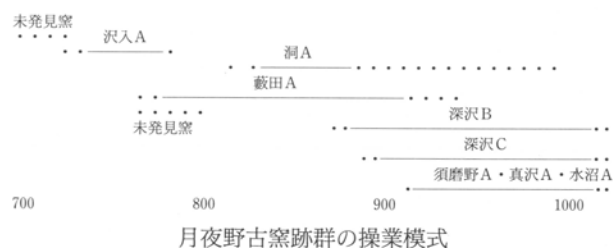
上野北部地域では、現在のところ8世紀第2四半期に操業が確認されている沢入A支群が最も古い段階のものである。しかし、村主遺跡からは7世紀末から8世紀初頭の須恵器坏が出土しており、これが胎土の特徴から在地生産品である可能性が高く、この地域でも7世紀末から8世紀初頭には須恵器生産を開始していたと見られるが窯跡は未発見である。8世紀第2四半期に生産を開始した沢入A支群は、8世紀後半には生産を停止し、代わって8世紀末から9世紀前半には洞A支群と藪田A支群が本格的な生産を開始し、洞A支群は9世紀後半まで、藪田A支群が10世紀前半まで生産を継続した。洞A支群が生産を停止する時期と前後して深沢B支群が、やや遅れて深沢C支群が生産を開始し、10世紀になると須磨野A支群、真沢A支群、水沼A支群が加わる。これに10世紀代にも生産が想定される洞A支群4号窯跡を含めると、10世紀代には7支群が須恵器生産をしていたことになる。こうした月夜野古窯跡群の生産が消費地でどのように捉えられるのか、沼田市の戸神諏訪遺跡を例に見てみる

（三浦 1990）。戸神諏訪遺跡の集落展開初期の8世紀後半には、沢入A支群の製品が供給され、9世紀第1四半期には藪田A支群の製品と未発見の窯跡の製品が、第2四半期から第3四半期の時期には藪田A支群の製品が供給されている。そして9世紀末になると藪田A支群以外の製品、おそらく深沢の製品が供給されたと考えられる。こうした供給のあり方から、それぞれの時期の主體的生産をした窯跡がある程度推定される。つまり、8世紀中から後半段階は沢入A支群、9世紀代が藪田A支群、9世紀末以降10世紀代は深沢B・C支群が主體的生産をし



1. 水沼支群 2. 真沢A支群 3. 深沢B支群
4. 深沢C支群 5. 須磨野A支群 6. 沢入A支群
7. 藪田A支群 8. 洞A支群

第1図 月夜野古窯跡群（国土地理院 1：50000）



ていた可能性が高いのである。

上図のように、7世紀末以降11世紀まで一地域において発展的に連続的須恵器生産が行われたように見えるが、大江・中沢両氏によれば月夜野窯跡群は各窯跡の関係が技術的に不連続であり、前段階において未開発地域に開窯されているという特筆すべき点があるという。各窯跡群の技術的な不連続については、沢入A支群が東海系、続く洞A支群が秋間系であり、これに一部併行しながらも後続する藪田遺跡は、秋間系の技術をベースに、新たな要素として東北地方の工人の関与を想定している。また、未開発地域での開窯について、北毛地域での

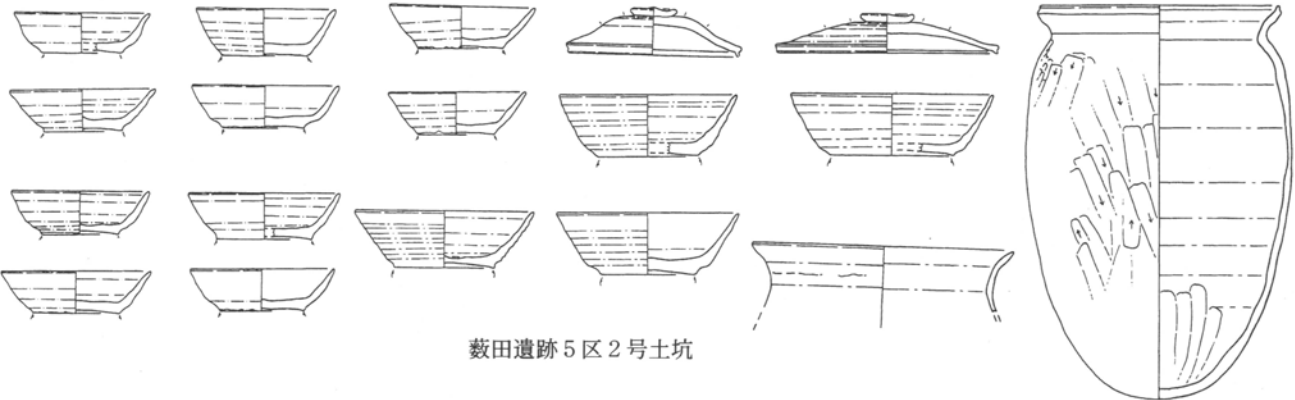
須恵器生産は本来古墳時代に開発が進んだ後田遺跡などの地域こそふさわしい場所であるにもかかわらず未開発地域で開窯することは、生産を支える地域盟主的存在が希薄であることが原因であるとし、開窯そのものが国家的設置ではなかったかとしている（大江・中沢 1985）。

2. 月夜野型羽釜の成立と系譜（第2図～第7図）

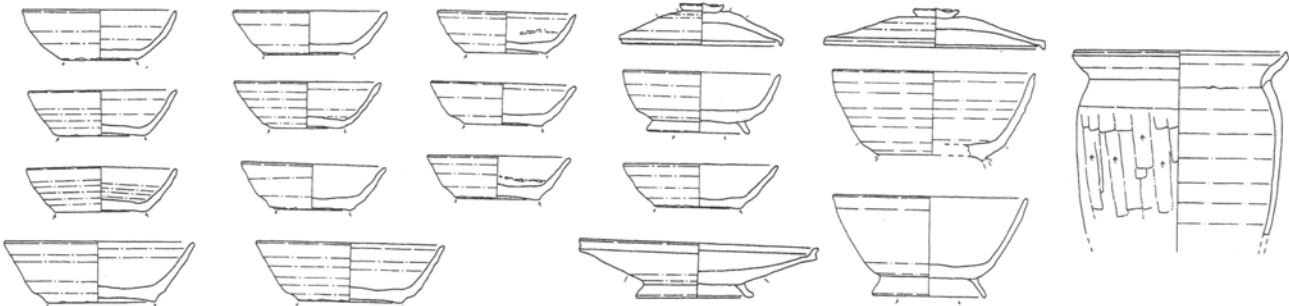
月夜野型羽釜の特徴は、中沢氏の定義によれば、器形が「鐏の付く地点を大きな変換点として、口縁部が立ち上がっていく」点と、「鐏より下の整形が基本的にヘラ削りによってなされており、このヘラ削りはほぼ直線でしかも底部付近から口縁部に向かって行われている」ということになろう（中沢 1984）。このような特徴の月夜野型羽釜は、資料の集積に伴って器形と整形にバラエティがあることがわかり、中沢氏らによってそれが時間的変遷として捉え直されている。中沢氏は村主遺跡の羽釜を分析し、器形と整形をもとに4段階の変遷を提示している（中沢 1986）。これに対して三浦京子氏は、中沢氏の変遷観を踏襲しながら、戸神諏訪遺跡の羽釜を土器変遷のVI～IX段階までの4段階に位置づけ、これを中沢氏の第1段階より以前にVI・VII段階、第1段階に併行するものとしてVIII段階、第1段階と第2段階の間にIX段階を設定している（三浦 1990）。これは月夜野型羽釜が、単純に7段階の変遷が捉えられるというわけではない。それは、中沢氏が羽釜そのものの変遷を提示したのに対して、三浦氏は土器総体の段階設定の中に羽釜を位置付けたものであり、同じステージでは単純に比較できないからである。ただ注目されるのは、中沢氏の第1段階以前に、必ずしも第1段階の月夜野型羽釜の概念に当たらないような羽釜が存在していることである。したがって本稿では、中沢氏の4段階変遷に三浦氏が中沢氏の第1段階に先行するとした羽釜を加えたI～Vの5段階（第2図～第4図）として捉えておきたいが、中沢氏の第3段階と第4段階の羽釜の変化は急激であり段階の欠落が想定されることから、将来的にはさらに段階の設定が可能となろう。月夜野型羽釜の初源段階とした第I段階の資料には、戸神諏訪遺跡94・98・125号住居などがある。この最古段階の資料の中で注目したいのは、98号住居出土の丸底の羽釜である（第2図）。類似の羽釜は、水上町の北貝戸遺跡8号住居などからも出土例がありこれが例外的な資料ではない。低部が丸底である以外は、プロポーション、外面整形ともに月夜野型羽釜の特徴を持っており、月夜野型羽釜の一形態と見て差し支えない。月夜野型羽釜が須恵器系の煮炊具であることは、須恵器窯跡から出土することや還元焰焼成の羽釜が存在することから明らかであり、前段階に主体的であった武蔵型甕をベースとして成立することは考えられない。本来、上野の須恵器工人は、西毛・東毛・北毛の地域を問わず丸底の長胴甕

という器種を持たず、まして煮炊具生産の伝統はなかった。それが、10世紀を前後する時期に突如として、羽釜という特異な形態の煮炊具を成立させているのである。その特異な形態の出自とともに、ベースとなる須恵器系の煮炊具があったと考えた方が理解しやすいのではないだろうか。そこで参考となるのが、第2図でプレI段階とした藪田遺跡5区2号土坑や6区1号住居（第6図）などから出土している丸底の長胴甕（ロクロ甕）である。これらの資料には、外面に平行叩きを持つものもあるが、月夜野型羽釜と同様に縦位のヘラ削りを施すものもある。これらの資料は9世紀代のものであり、羽釜の成立時期に先んじていることは明らかである。特に、藪田遺跡5区2号土坑出土の長胴甕は、肩部より下位のプロポーションが戸神諏訪遺跡98号住居出土の丸底の羽釜（第2図）と良く似ている。また、この丸底の羽釜と同遺跡46号住居出土の月夜野型羽釜（第3図）は、平底であること以外相似形であることがわかる。さらに、この丸底の長胴甕に羽釜最大の特徴である鐏を付けるという発想は、鐏が成立段階ですでに機能的でないことから、後述するような鉄釜の持つ希少性と先進性の象徴として採用されているのではないだろうか。資料的に少ない中で結論を急ぐ必要はないが、月夜野型羽釜の成立には、丸底の長胴甕が重要な役割を果たしていると言えよう（第5図）。

ではこのような丸底の長胴甕は、いかなる系譜で出現するのであろうか。これらの資料を出土している藪田遺跡は、前述のように藪田A支群で須恵器生産をした工人の集落と見られている遺跡である。藪田A支群は同地域で操業した洞A支群と時期的には重なりながら後続する支群であるが、秋間系とされる洞A支群の技術系譜にストレートに乗っていないという。瓦の叩き目の系譜、左回転の製品の多さ、体部下半のヘラ削り、轆轤整形の長胴甕などの存在から、福島県などの東北系工人の関与が指摘されている窯跡である（大江・中沢 1985）。しかし、第6図に示したように福島県地域は、陸奥型甕という平底系の甕の卓越する地域であり、丸底系の甕は北信型甕や北陸型甕（越後型）など日本海側に特徴的なものである。藪田遺跡の丸底の長胴甕は、口縁部形態から東北地域との関連よりも新潟県などの北陸地域との関連を想定した方が良いだろう。この北陸との関係については、魚沼郡地域に上野産須恵器や土師器が搬入されているだけでなく、上野系の技術による須恵器生産も想定されている。（坂井 1991）藪田遺跡6区1号住居の叩きのある長胴甕（第6図）などは、他の集落へ積極的に供給された形跡がなく、工人自らが使用するためのものと考えられる。したがって技術の伝習などによるものではなく、藪田遺跡の成立には、北陸系工人が直接的に関与した可能性が高いのである。この工人たちが持ち込んだ丸底の長

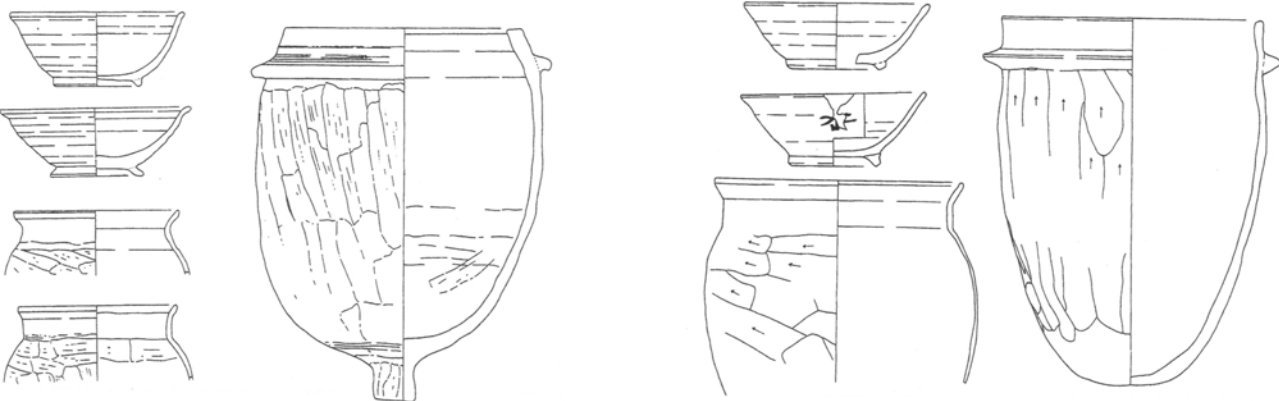


菟田遺跡 5 区 2 号土坑



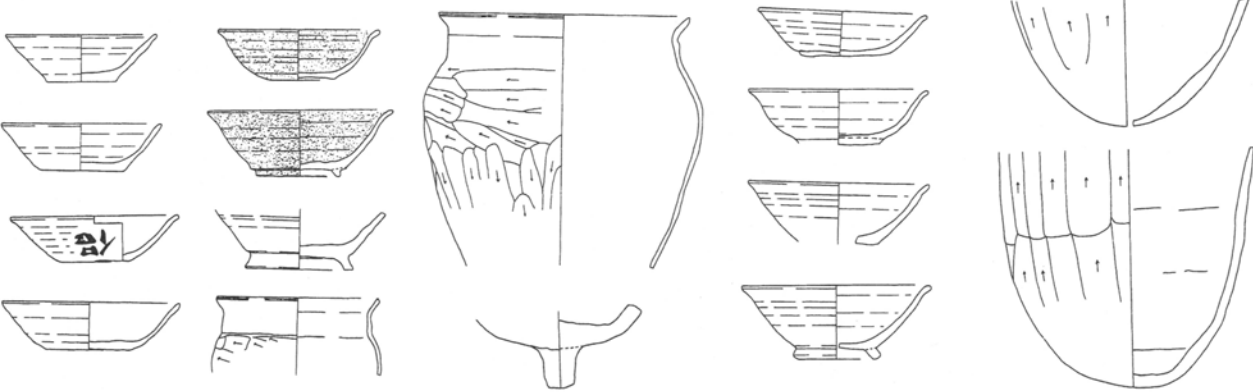
[プレ I 段階]

菟田遺跡 5 区 40 号土坑



石墨遺跡 D 区 12 号住

戸神諏訪遺跡 98 号住



[I 段階]

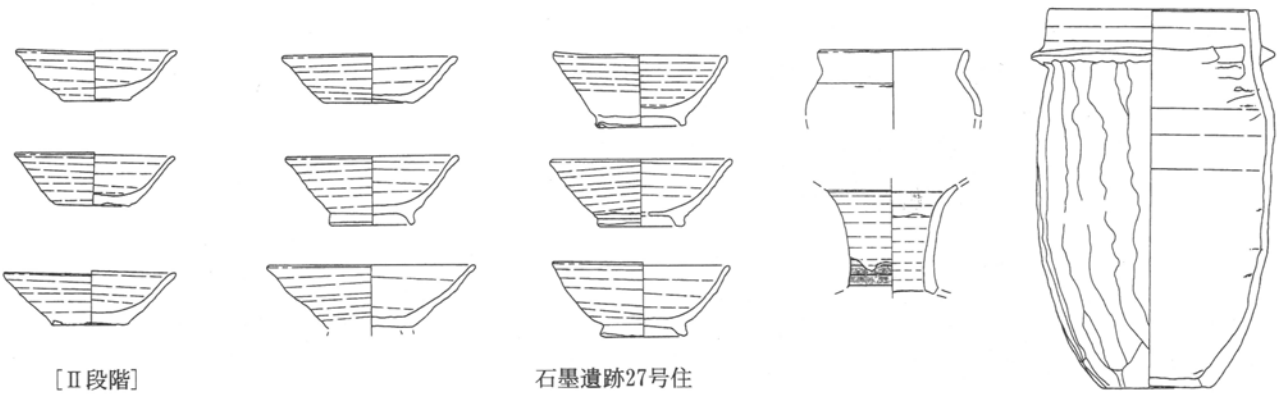
戸神諏訪遺跡 94 号住

戸神諏訪遺跡 125 号住

第 2 図 段階設定(1)

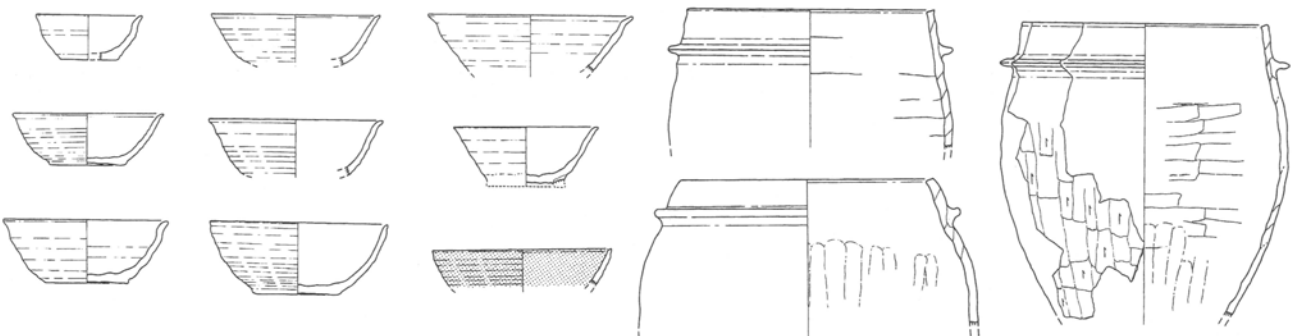


戸神諏訪遺跡46号住

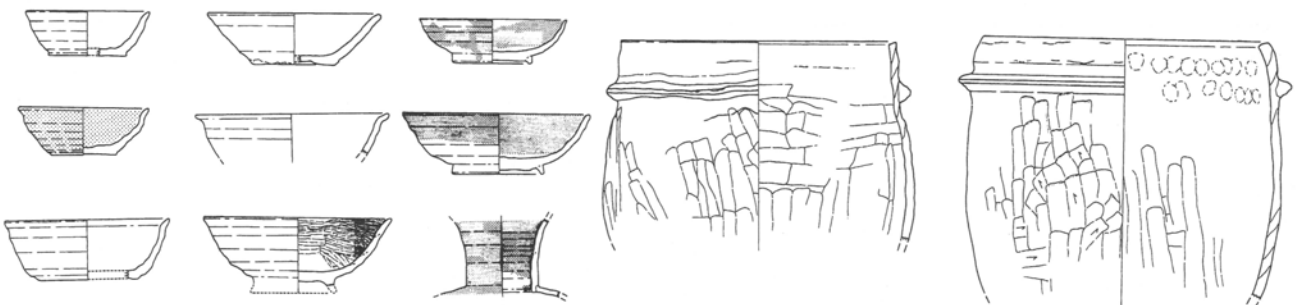


〔Ⅱ段階〕

石墨遺跡27号住



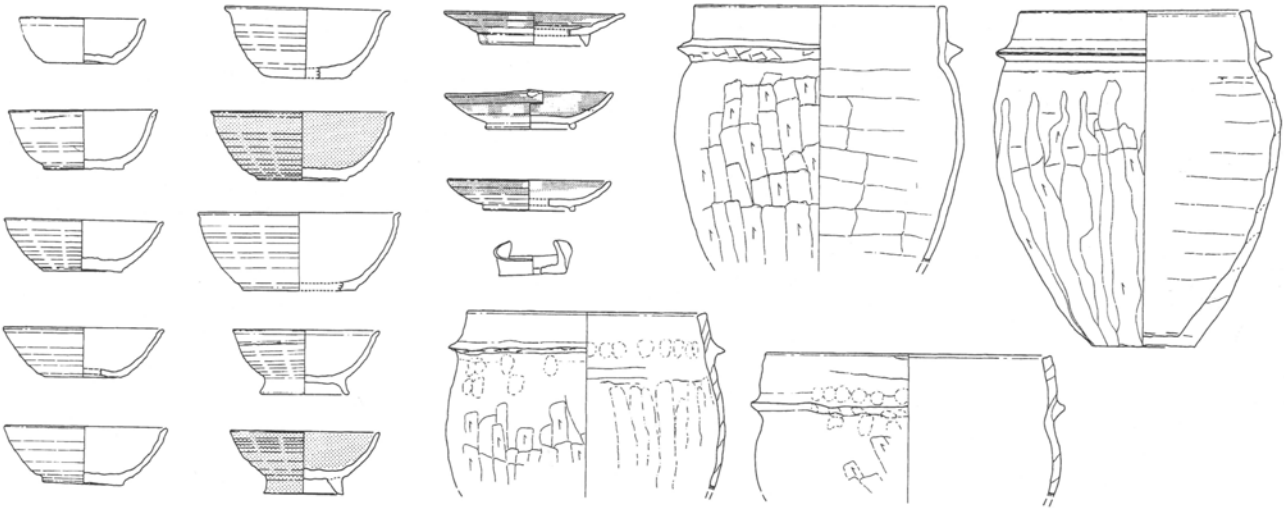
村主遺跡5号住



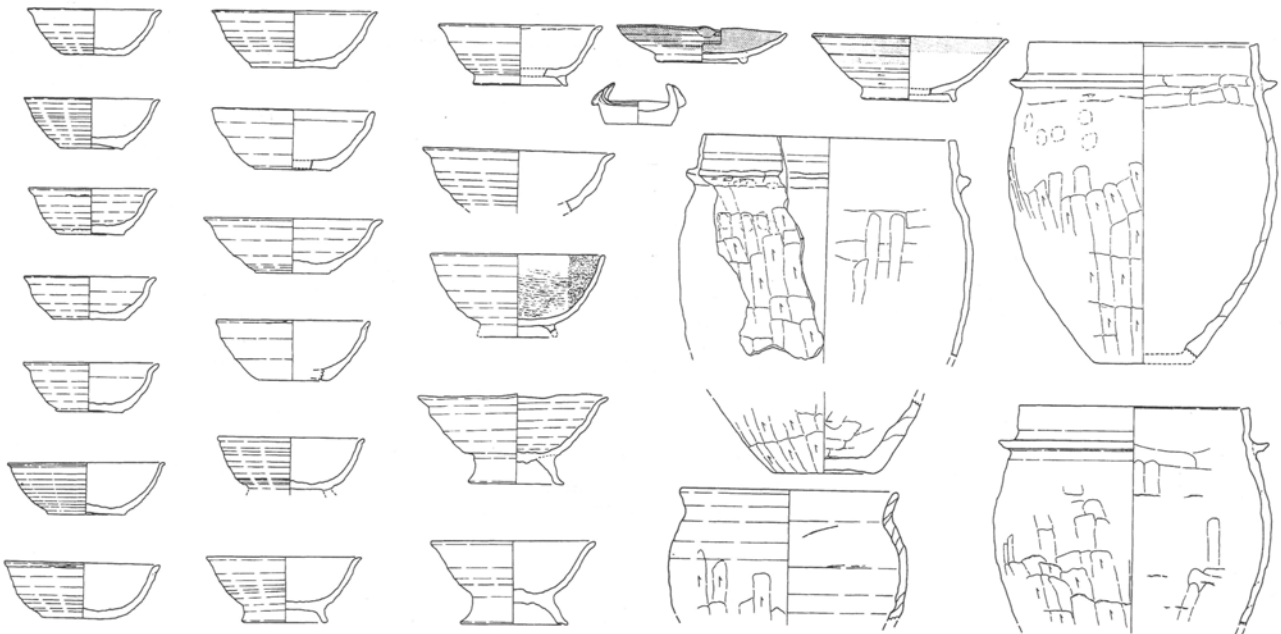
〔Ⅲ段階〕

村主遺跡7号住

第3図 段階設定(2)

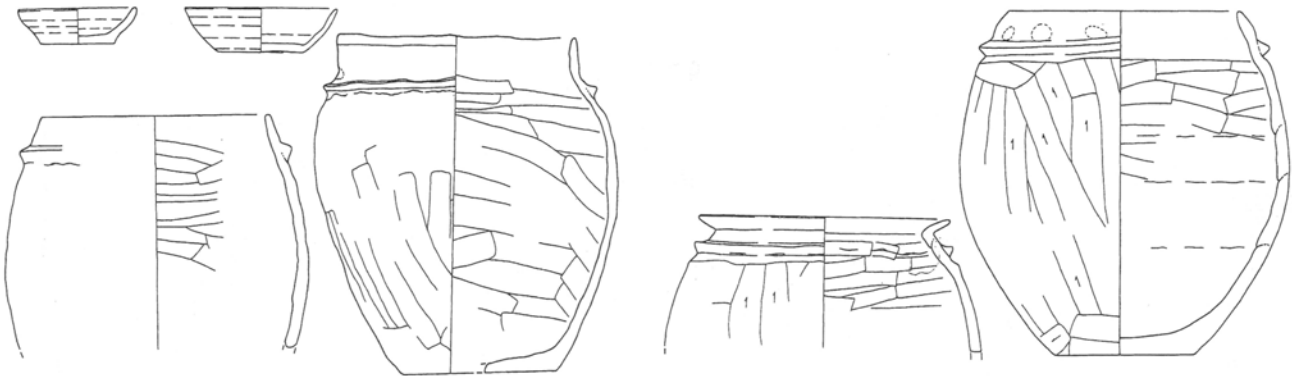


村主遺跡 3 号住



[IV段階]

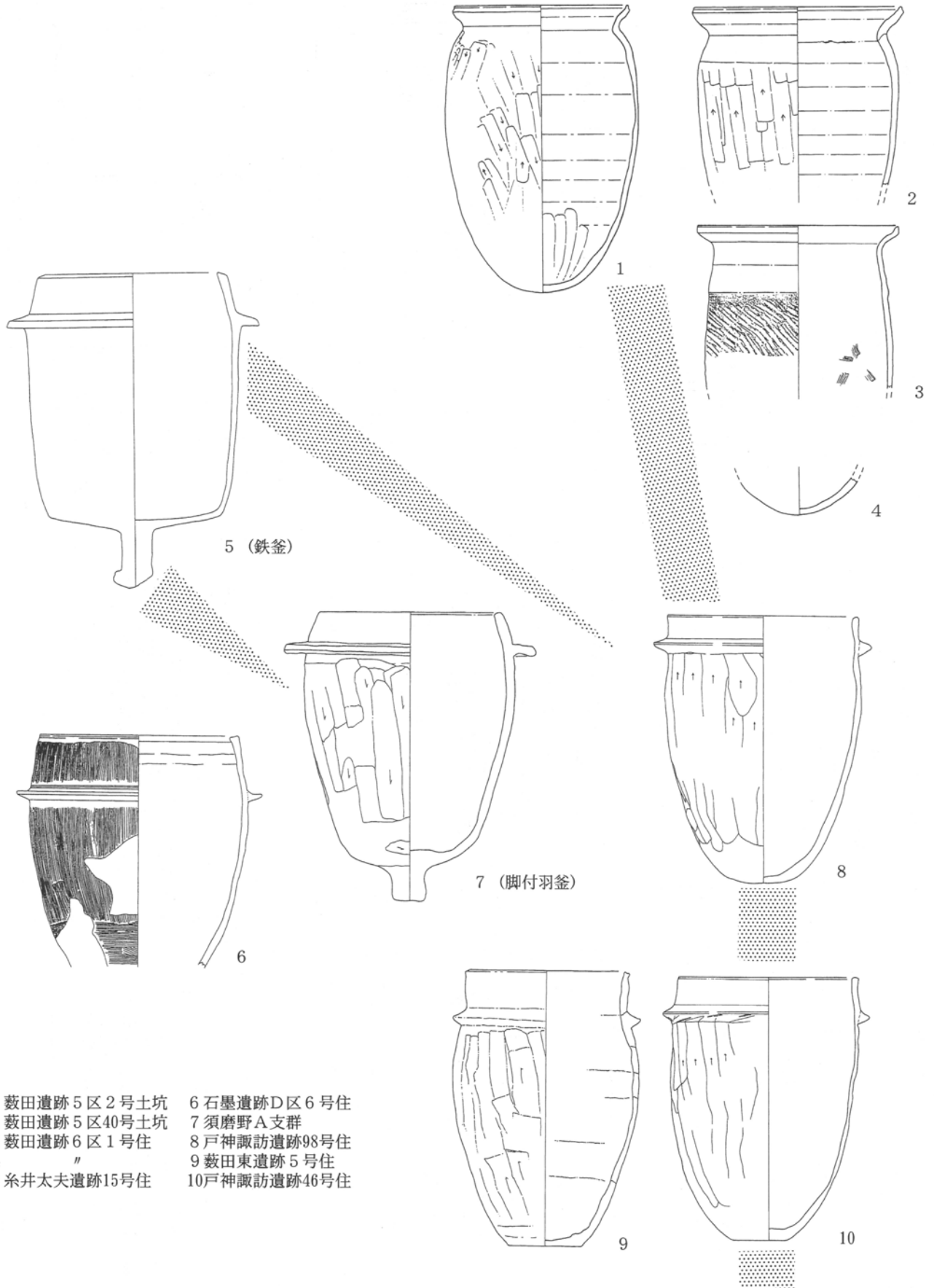
村主遺跡 17 号住



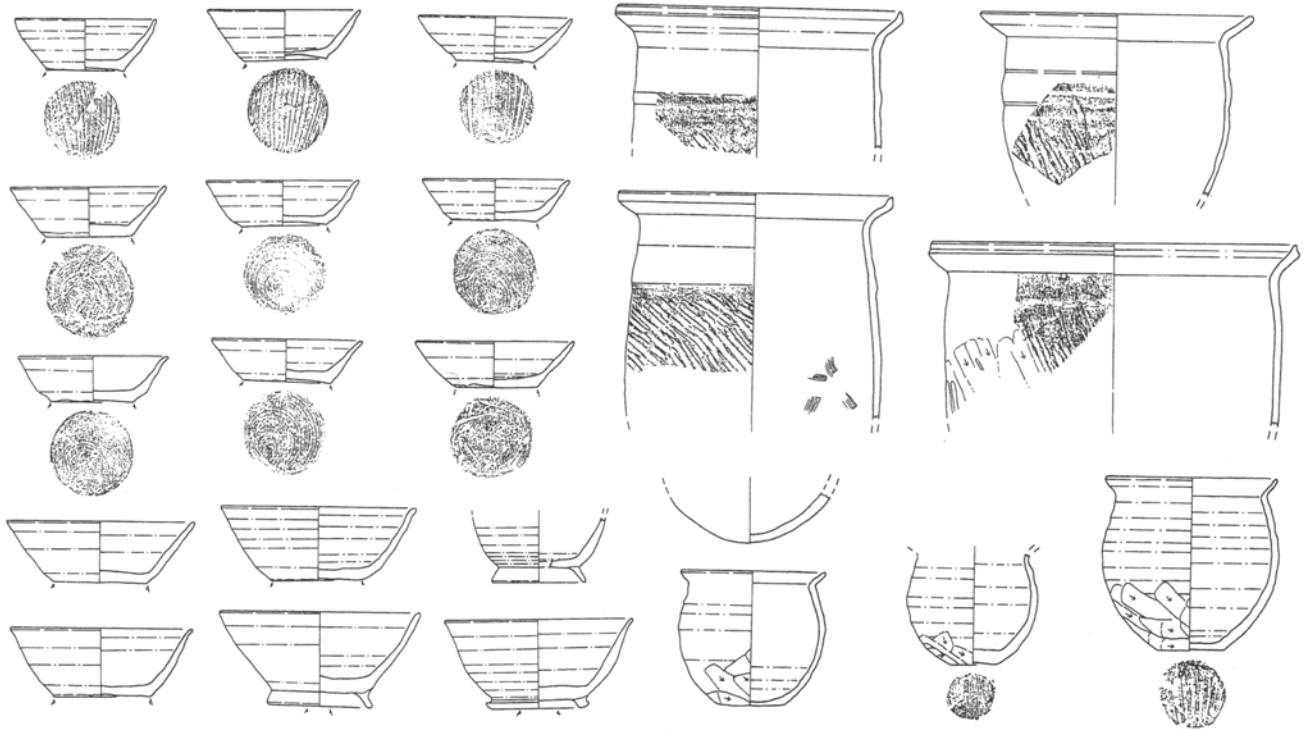
[V段階]

戸神諏訪Ⅲ遺跡 55 号住

戸神諏訪Ⅲ遺跡 96 号住



第 5 図 月夜野型羽釜の成立過程



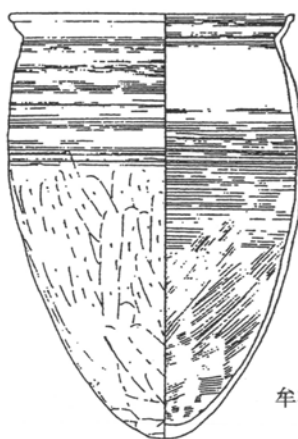
藪田遺跡6区1号住

福島県



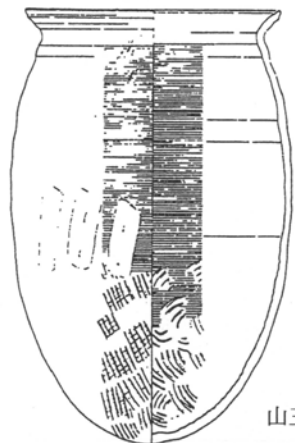
若松城三の丸跡

長野県

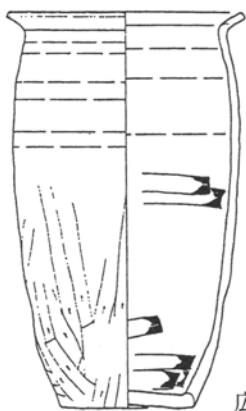


牟礼バイパス
B・C・D地点

新潟県

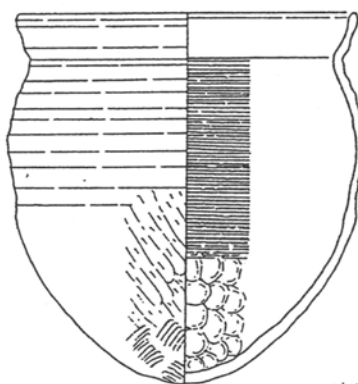


山三賀Ⅱ遺跡



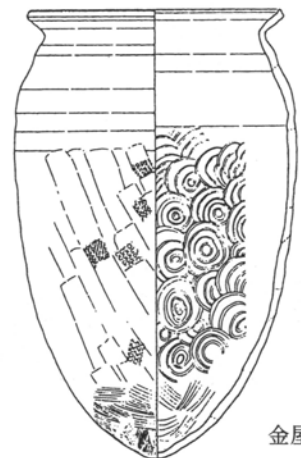
広網遺跡

陸奥型



二ツ宮遺跡

北信型



金屋遺跡

北陸型

第6図 月夜野型羽釜の系譜

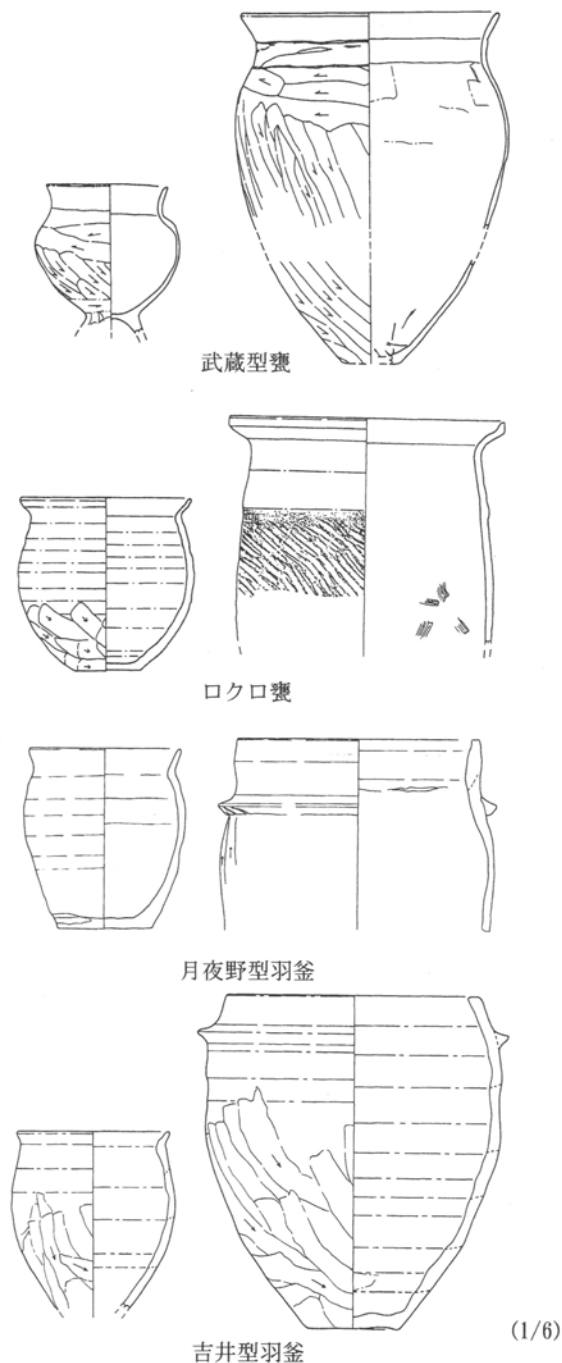
(1/6)

胴甕を形態的・技術的ベースとして次世代を担う羽釜が成立したと見ると理解がしやすいのではないだろうか。

こうした羽釜成立のプロセスは月夜野型羽釜だけのものではなく、吉井型羽釜も中部地域に出自のあるロクロ甕をベースとして成立している可能性がある。吉井型羽釜の成立前段階にロクロ甕技術もすでに群馬県に導入されており、このロクロ甕と吉井型羽釜は整形技法だけでなく、胴部下位のプロポーションも類似している。また、第7図のように、9世紀代の武蔵型甕と小型台付甕のセットに代わるものとして、10世紀代には羽釜と小型ロクロ甕がセットになることから両者の関係は明らかであろう。

東毛型羽釜に関しては、出土数があまり多くないので実態が捉えにくい。成整形・胎土・焼成共に土師器に近い特徴があり、東毛地域への吉井型羽釜の供給が西毛地域に比較して十分ではなかったために、それを補うために土師器工人によって生産された羽釜であった可能性がある。

ここで第I段階の様相の一つとして「脚付羽釜」について触れておきたい。中沢氏は脚付羽釜について、「羽釜の底部に支脚のついた羽釜である」とし、器形、口唇部形状、胴部ヘラ削りの方向などの相違点が多く、「月夜野型羽釜と脚付羽釜は、近似しているようにも見えるが、多くの点において異なっている」として月夜野型羽釜の範疇には含めていない（中沢 1986）。この脚付羽釜は、前述のように月夜野古窯跡群中、4支群で生産された可能性があるが、大量に生産された形跡はなく、還元焰焼成されているものが多いことから羽釜成立の初期に位置付けられるものである。石墨遺跡D区12号住居（第2図）からは、武蔵型甕と共伴して完形の脚付羽釜が出土していることが位置付けの傍証となろう（第2図）。三浦氏は、脚付羽釜を含む初源期の羽釜を検討し、羽釜の源流として「5世紀後半に朝鮮半島から伝来した竈具の竈戸に求めるのが妥当」との考えを提示し、こうした祭祀器具が日常用品に転化していく過程は不明としながらも、特に鏝のしっかりとした脚付羽釜については、「長野・山梨県などの鏝のしっかりした羽釜と関連」する可能性を指摘している。また、長野県更埴市の馬口遺跡出土の鉄釜との形態的類似性をもって、こうした鉄釜との関連のなかで「羽釜生産開始の模索の中から生まれたものの一つ」という見解をも提示している（三浦 1990）。これまで確認されている脚付羽釜は、①口縁端部が丸く、②鏝は比較的長くやや下向きに付けられ、③胴部下半に張りがあり、④胴部ヘラ削りが鏝から下方に向かう、⑤脚端部が平らで一方に傾くなどの点で共通している。こうした特徴が何に起因するものであるのかは、馬口遺跡の資料と良く似た資料の、昭和村の糸井太夫遺跡14号住居出土鉄釜（第5図）の形態と比較すると大半が理解できると思



第7図 煮炊具のセット関係

う。この鉄釜は羽釜成立後のものであるが、脚付羽釜は前段階に存在したと予測されるこのような希少な鉄釜を忠実に模倣して成立した可能性が高いのである。しかし、その生産量は極めて少量・短期間で終了した可能性が高く、最終的には月夜野型羽釜に収斂していったのであろう。上記丸底の羽釜が、すぐに平底化して月夜野型羽釜が成立するのと同様に、新たな器種が誕生する段階の試作品的な位置付けで理解すべきであり、三浦氏が指摘した（三浦 1990）ように、まさに模索の産物とすることができるのである。

3. 月夜野型羽釜の生産と供給（第1表）

月夜野古窯跡群8群の中で、羽釜が成立する9世紀末から10世紀初頭段階で操業している窯跡群は、藪田A、須磨野A、真沢A、水沼A、深沢B・Cの各支群および洞A支群4号窯と考えられる。この中で、須磨野A支群、真沢A支群、洞A支群4号窯は、資料中に脚付羽釜が確認されていることからその生産をしていたとされているが、月夜野型羽釜そのものの生産は未確認である。また、藪田A支群の工人集落の一部と見られる藪田東遺跡の第3群粘土採掘坑からは、脚付羽釜と考えられる羽釜が出土している。この羽釜が洞A支群などからの搬入品でないとすれば、藪田A支群でも10世紀前半の時期に脚付羽釜を生産した可能性が高い。この脚付羽釜は、形態的バラエティがなく、形態変遷が追えるほどに長期間にわたって生産された可能性は少ないものである。また、還元焰焼成したものが多く、成立初期の段階のものである。

一方、同様に成立初期の戸神諏訪遺跡98号住居出土の月夜野型羽釜は、胎土の特徴が深沢C支群に近いので、上記の支群すべてが羽釜の生産を一斉に開始したように見える。しかし、深沢B・C支群及び水沼A支群以外の窯跡では、いわゆる月夜野型羽釜の生産を確認することができない。中沢氏によれば、月夜野古窯跡群の胎土はその基盤となる層の違いで2群に分けることが可能で、その最大の違いは石英安山岩質凝灰岩地帯の胎土には、1～2mm大の石英粗粒が多く、緑色凝灰岩地帯の胎土にはこの石英粗粒がほとんど入らないことであるという（中沢 1986）。この観点から観察してみると、月夜野型羽釜の胎土には石英粗粒を多く含むものが多いことに気づく。このことは石英安山岩質凝灰岩地帯の窯が、羽釜を主体的に生産していたことを裏付けるものである。この地帯で月夜野型羽釜の生産が確認されているのは、現在のところ深沢B・C支群だけである。しかし、脚付羽釜の出土している須磨野A支群、真沢A支群が月夜野型羽釜を生産しなかったとは即断できない。それは、村主遺跡3号住居出土の羽釜では、石英粗粒を多量に含む胎土の羽釜が主体を占めているが、少数例石英細粒を少量含むものとまったく含まない羽釜が存在しているのである。こうした資料の存在は、緑色凝灰岩地帯に立地する洞A支群や藪田A支群などでも月夜野型羽釜の生産が行われた可能性を示唆するものであり、10世紀初頭の段階で脚付羽釜の生産を立ち上げた支群は、その後生産量の多寡は不明であるが月夜野型羽釜の生産を担っていったと考えるのが自然であろう。

月夜野型羽釜の主体的生産を担ったのは、石英安山岩質凝灰岩地域の窯跡であることは確実であり、その最有力候補が深沢B・C支群である。しかし、これらの窯跡出土資料から各段階の生産量の推移は確認できないため消費地での傾向から生産量の推移を見てみる。第I段階

第1表

遺 跡 名	市町村	I 段階	II 段階	III 段階	IV 段階	V 段階	備 考
北 貝 戸 遺 跡	水 上 町						丸底
藪 田 遺 跡	月夜野町						脚付
藪 田 東 遺 跡	月夜野町						
村 主 遺 跡	月夜野町						脚付
洞 I・II・III 遺 跡	月夜野町						脚付
後 田 遺 跡	月夜野町						脚付
大 釜 遺 跡	月夜野町						
梨の木平遺跡	月夜野町						
城 平 遺 跡	月夜野町						
前 中 原 遺 跡	月夜野町						
深 沢 遺 跡	月夜野町						
大 竹 遺 跡	月夜野町						
高 平 遺 跡	月夜野町						
石 墨 遺 跡	月夜野町						脚付
戸神諏訪遺跡	沼 田 市						脚付・丸底
戸神諏訪III遺跡	沼 田 市						吉井型
下川田下原遺跡	沼 田 市						
町田上原遺跡	沼 田 市						
町田手古又遺跡	沼 田 市						
岡谷毛勝遺跡	沼 田 市						
赤 坂 遺 跡	沼 田 市						
稲 荷 遺 跡	沼 田 市						
糸井宮前遺跡	昭 和 村						吉井型
森下中田遺跡	昭 和 村						吉井型
糸井太夫遺跡	昭 和 村						鉄釜
白井二位屋遺跡	子 持 村						吉井型
五 十 嵐 遺 跡	中之条町						
天 代 瓦 窯	中之条町						
久宮間戸遺跡	渋 川 市						
久 保 遺 跡	渋 川 市						
田 中 II 遺 跡	渋 川 市						吉井型
有 馬 遺 跡	渋 川 市						吉井型
倉 海 戸 遺 跡	榛 東 村						
道 城 遺 跡	吉 岡 町						吉井型
大久保A遺跡	吉 岡 町						吉井型
北 原 遺 跡	群 馬 町						吉井型
堤 上 遺 跡	群 馬 町						吉井型

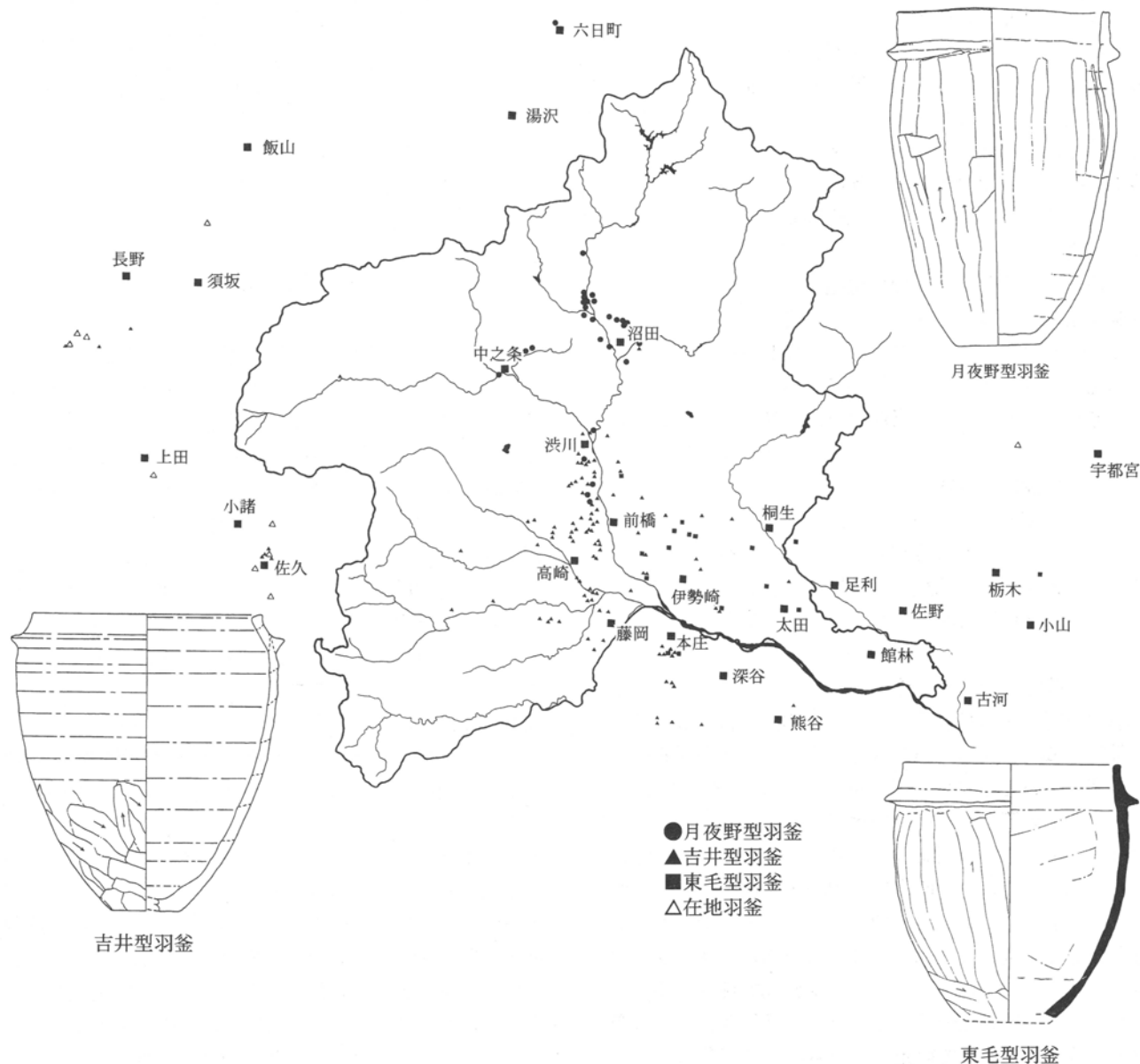
の羽釜は未だ少数しか確認されず、出土量の増えるのは第II段階から第IV段階までである。月夜野型羽釜が主体的に供給された遺跡の多くで、第II段階から第IV段階の製品が連続的に供給されていたことが確認されており、この間は安定的に供給がされたことがわかる。中沢氏が第1段階とした時期は、月夜野型羽釜の量産体制が整い、安定的な供給が達成された段階を捉えていたのであろう。また、遺跡数の増減があまり明確でないため即断はできないが、第II段階で安定的に生産が開始された以後、第III段階～第IV段階に際立った増産が図られた様子は見られず、第V段階では急速に縮小している。こうした傾向は、後述する分布地域の広がりでも確認されることであるが、月夜野型羽釜は、成立当初から限定された供給地域に向けて必要量が生産されたものと考えられ、他地域への供給までも視野に入れた生産体制をとっていなかったと考えられる。

4. 小地域圏の形成

月夜野型羽釜の出土が確認できた遺跡は、第8図に示

したとおりである。これまで中沢氏や三浦氏が指摘していたものと基本的に変わるものではない(中沢 1986、三浦 1990)。生産地を控えた沼田市・月夜野町・水上町は吉井型羽釜の出土例は管見に触れたものは沼田市の戸神諏訪遺跡の1例しかなく、基本的に月夜野型羽釜だけが供給された地域である。同地域に隣接する川場村には出土例が確認できていないが、調査事例がないことから未確認なのであり本来は月夜野型羽釜が供給されたはずである。また、吾妻郡の中之条町では月夜野型羽釜だけが確認されているが、長野原町では吉井型羽釜が出土しているので、必ずしも吾妻郡全域が月夜野型羽釜の供給地域ではなかった。南部地域への通路に当たる昭和村・子持村は月夜野型羽釜が主体的であるが、吉井型羽釜の出土も確認されている。これより南部地域では、渋川市久

宮間戸遺跡 2 号住居・久保遺跡 2 号住居、榛東村倉海戸遺跡 1 号住居、吉岡町道城遺跡 1 号住居・大久保遺跡 I 区 106 号住居、群馬町北原遺跡 99 号住居などで出土が確認できるが、これらの地域はあくまでも吉井型羽釜が主体であり、月夜野型羽釜はごく少量が出土するだけである。この他、新潟県六日町の金屋遺跡からは、月夜野型羽釜と見られる羽釜が 55 個体出土していることが知られていたが、三浦氏が実見したところでは、技法などについては同類と見られるが、胎土が異なっているとのことであり、搬入されたものであるかどうか確証は得られていない（三浦 1990）。また、技法的に類似する羽釜は、秋田県大森町の下田遺跡からも 1 個体出土しているが、胎土・焼成の他、口唇部形状と底部の大きさに違和感があり、月夜野型羽釜との関連は想定されるものの在地生産



第8図 月夜野型羽釜の分布

された羽釜とするのが妥当であろう。

このように見ると、月夜野型羽釜が主体的に供給された地域は、吾妻川と利根川合流点から北側の地域に限定することができそうである。この限定地域内においては、月夜野型羽釜の供給された地域は、量産段階の第Ⅱ段階から第Ⅳ段階まで、とくに大きな違いがあるとは考えにくく、成立当初からその供給地域が限定されていたと考えられるのである。

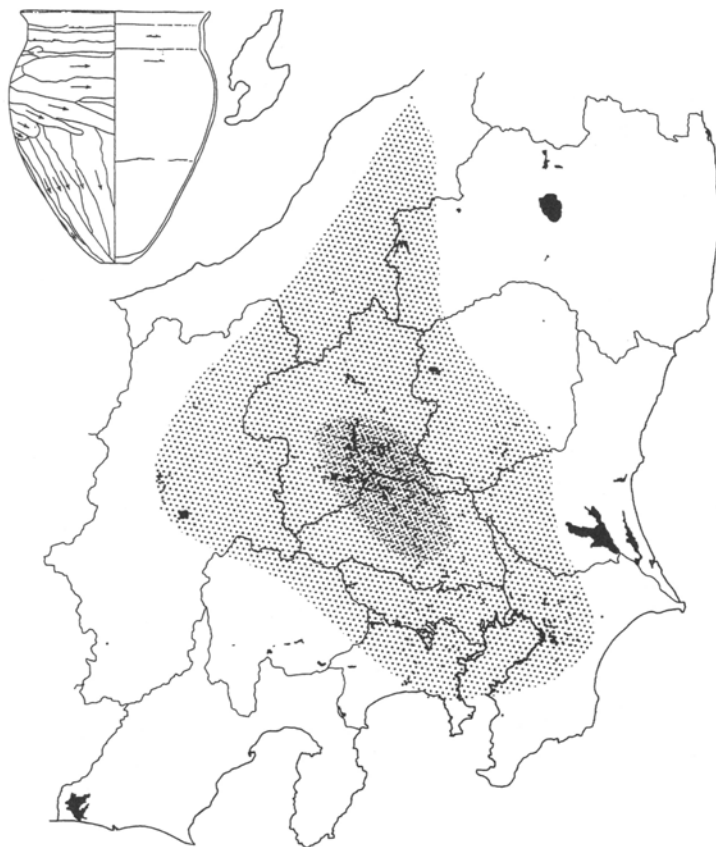
吉井型羽釜の分布は、田中広明氏らによってかなり広範囲の分布が確認されているが(田中・末木 1997)、私の調査と合わせてみると、群馬県の西毛を中心として北は前述の吾妻川と利根川合流点より南部の地域から、南は武蔵北部の中堀遺跡を中心とした児玉・賀美郡までの分布が確認できる。西は佐久市までは確実に分布し、更埴市では類似する羽釜の存在は確認できるものの、基本的には信濃独特の羽釜が分布している。また、東では東毛地域はほぼ全域が分布地域と見ることも可能であるが、出土量は西毛と比較すると明らかに少なく、この地域には東毛型羽釜とも言うべき羽釜が一定量共伴している。下野では足利市と国分寺町で2例の東毛型羽釜類似の羽釜を検出したほか、鹿沼市で在地甕に鏝を付けたような独特の羽釜の存在を確認しただけで、吉井型羽釜の確実な出土例は未検出である。このように吉井型羽釜は、国域を越えて信濃東部から武蔵北部まで分布しているが、その中心地域は現利根川西岸から鐺川流域にあり、周囲に比較的広い範囲の周辺地域を形成しているように見える。

こうした比較的広域分布する吉井型羽釜やこの羽釜と補完的に分布する東毛型羽釜と比較すると、月夜野型羽釜は上野北部地域に明らかな小地域圏を形成している。

5. 武蔵型甕の生産と流通

小地域圏流通の月夜野型羽釜との比較材料としては、前段階に広域流通していた武蔵型甕³⁾を取り上げるが、この甕については別稿(桜岡 2003)を用意しているので、ここではその概要について述べたい。

武蔵型甕は福田健司氏が南武蔵の資料を用いて設定したもので、「8世紀第3四半期を中心とする時期に出現する、口縁部が「く」の字状で、頸部下から胴部上半を斜方向、胴部中央から底部にかけて縦方向にヘラ削りをする、非常に薄い赤褐色の甕」と定義された(福田 1978)。しかし、この定義は一連の組列として認識される器形変遷の部分を取り取って設定されたもので、武蔵型甕の全容について示したものではない。したがって、武蔵型甕



第9図 武蔵型甕の分布と中心地域

を型式学的に連続する一連の組列として認識した場合(鈴木 1983)、その出現は7世紀中頃まで遡って考えることが可能である。この武蔵型甕は、出土量の問題はあるが遅くとも8世紀前半には広域分布を達成しており、南武蔵での出現として捉えられた8世紀中頃以降9世紀後半までの間、北は越後南部、東は下野南部、南は下総・南武蔵から相模東部、西は信濃東部に及ぶ最大の広域分布を示す(第9図)。これが、10世紀前半には一気に分布圏が狭くなり上野南部から北武蔵の地域に収斂する。この収斂する時期の分布域が武蔵型甕の中心地域であり、生産地域と考えられるのである。この地域は武蔵型甕の成立する前段階には「有段口縁坏」の中心地域と認識されている地域であり(田中 1986、長谷川 1995-2)、この時期的に連続する両者は同一地域で生産されたものであろう。

武蔵型甕の生産については、一元的生産・流通と、地域生産の併存(長谷川 1996-1)や小地域生産(田中・末木 1997)などいくつかのモデルが出されているが、武蔵型甕の器形・整形・胎土・焼成の均質性は、少なくとも小地域生産で達成されたとは考えにくく、特定地域で大量生産されたものが広域に流通したのと考えている。一例を上げるならば、上野北部地域は7世紀末まで、古墳時代的な厚手で白く発色する粘土を用いた器面をナデ

整形する甕を使っていた地域であるが、そこに8世紀を前後する時期に突如として薄手で赤褐色の武蔵型甕が出現する。これは、坏についても同様に内面黒色厚手の「後田型坏」から赤褐色薄手の「北武蔵型坏」への転換が図られている。この器形・胎土・焼成等の違いは明瞭で、武蔵型甕がそれまでの上野北部の土師器生産の延長上で生産されたとは考えられず、北武蔵型坏とともにその大半が南部地域から供給されたと考えるのが妥当である。

この広域供給を可能とするような土師器の大量生産に関しては、上野南部地域の伊勢崎市波志江中宿遺跡や光仙房遺跡などで相次いで発見された4世紀後半と6世紀後半の大規模な粘土採掘坑の存在が一つの証明となろう⁴⁾。

この大量生産・広域流通のシステムを明確には描き出すことができないが、武蔵型甕の継続的かつ多量に供給された遺跡が、上野国府周辺や生産地から離れた武蔵国府周辺に顕著であることや、成立と展開の時期を考慮すると、官主導の物資集中と地域供給という流通形態の存在が予測される。しかし、武蔵型甕の旧国域を遙かに越えた一方通行の広がりや、官主導の流通だけでは説明できず、まして他地域との交流や交換とその再分配といった相互通行の流通でも説明しきれない。したがってそこには古墳時代後期に有段口縁坏を広域に供給させたような在地首長層のネットワークを背景とした、高機能製品としての武蔵型甕の商品的流通をも想定すべきではないだろうか。ただし、武蔵型甕が広域に流通したのは、その高機能性ゆえだけではなく、セットで生産された金属器指向（暗文土師器坏指向）の北武蔵型坏が（長谷川 1996-2、桜岡 1991）、時代に即したものとして広域に受け入れられたことがあげられる。逆に武蔵型甕が9世紀後半以降衰退した要因は、供膳具が金属器指向から磁器（施釉陶器）指向へと変化したことで、金属器指向土師器坏への需要減少の影響を考慮する必要がある⁵⁾。

6. 狭域流通の背景

月夜野型羽釜の分布から捉えた小地域圏は、10世紀前後に新たに形成されたものではなく、古墳時代にすでに形成されていた地域圏が、律令制地域支配が弛緩していく過程で再度鮮明化したものであろう。古墳時代の地域圏とは、上野北部のいわゆる「後田型坏」に象徴される南部地域とはまったく異なる規範の土器を使用した範囲である。「後田型坏」は、白色系粘土を使用した厚手の内黒土師器で、同様の粘土で作られた厚手で器面を撫で仕上げする甕とセットで生産されたものである。これらの土器群は、南部地域のいわゆる「鬼高式」とは違った、東北・北陸的な土器であり、「上毛野」の一部でありながら南部とは異質な文化圏を形成していた。この時期北部地域には前方後円墳を築造するほどの有力首長は生まれ

なかったが、奈良古墳群や塚原古墳群・金山古墳群などの円墳を築造する程度の在地有力者は成長しており、当然こうした有力者によって土師器生産は掌握され相互の連携によって地域としてのまとまりが保持されていたものと考えられる。しかし、そうした既得権益を無視するかのように、8世紀を前後する時期に南部地域の武蔵型甕と北武蔵型坏のセットへと急速に転換していき、北部地域での土師器生産は停止したかのように見える。代わって須恵器は7世紀末から8世紀初頭段階には南部地域からの須恵器生産の技術移植が行われ、自主生産が開始されることで土師器・須恵器ともに南部地域との違いがなくなる。沢入A支群が生産を開始する8世紀中頃を最後に、南部地域からの須恵器の供給はなくなり（大江・中沢 1985）、この段階に北部地域で必要最低限の須恵器生産体制が出来上がったものと考えられる。この間の南部地域からの土師器と須恵器の搬入、および須恵器生産技術の導入は南部地域からの一方的な流れであり、律令的地域支配の一環として進められた地域均質化の現れであったものと考えられる。その流通形態は、郡衙などの地域拠点の中継しての物資流通と共に、高機能製品としての商品流通によって末端まで浸透したことが想定されるのである。それが、藪田A支群の生産開始以降は、在地須恵器の供給量が増え北部地域の土師器供膳具は相対的に減少している。つまり、藪田A支群の増産を契機として南部地域からの土師器搬入は武蔵型甕に限定されたのである。このターニングポイントとなった藪田A支群の成立と展開は、地域集落への供膳具供給を主目的としていたことは明らかで、前段階に政治的背景を持って導入された須恵器生産の延長で達成されたものではない。それは官主導で行われたものでないことを示唆しており、須恵器生産を掌握した在地有力者の意志によるものであったろう。古墳時代から維持されてきたと考えられる北陸地域とのネットワークを背景として技術導入が行われ、生産の拡大が達成されたのである。8世紀以降、末端支配の中核をなした在地有力者は、時間の経過とともにしだいに自立した須恵器生産の掌握者として成長し、地域限定商品として供給を進めていったと考えられ、その具体化した姿が藪田A支群なのではないだろうか。そうした自立化への環境の整った10世紀を前後する時期に、武蔵型甕に代わって月夜野型羽釜が北部地域限定品として成立し供給されたものと考えられる。この月夜野型羽釜の成立によって、南部からの影響が排除され供膳具、煮炊具ともに地域生産・地域消費の形が完成したのであり、月夜野型羽釜の狭域流通は、北部地域が本来もっていた地域色とそれを共有する地域圏の範囲内で完結するものとして行われたものである。

7. まとめ

以上のように、上野地域は、武蔵型甕の衰退と前後して9世紀末から10世紀初頭に羽釜という新型の須恵器系煮炊具を成立させるが、特に月夜野型羽釜の成立には、北陸地方からの須恵器工人の移植と技術導入がベースとなったことが明らかになったと思う。それを可能としたのは、体制からの外圧ではなく、古墳時代から維持していた地域の持つ内圧であった。それは越後などの北陸地域と長い時間をかけた交流によって獲得した地域色の強い地域圏であり、体制の中に組み込まれながらも自立的に成長を遂げた土器生産の掌握者なのではなかったろうか。月夜野型羽釜の成立と狭域流通は、そうした地域色が表面化した姿であり、土器生産掌握者による地域圏内で完結した経済活動として理解することができる。地域を均質化しようとする政治的な力が見え隠れする武蔵型甕などの広域流通とは違った、北部地域の自立的な動きだったのである。

こうした自主性の強い北部地域における金井廃寺の造営や月夜野古窯跡群の開窯を国家的な設置と評価し、北部地域を地域的統合が未発達で中央統制されるような土地とする考え方(大江・中沢 1985)もあるが、8世紀前後に起こった南部地域の均質化が1世紀ほどで解体に向かったことを考えると、北部地域は南部地域よりも強い在地色と独自性があったと評価することができるのではないだろうか。そうした在地色の強さこそが、南部地域とは違った羽釜を成立させた原動力だったのであろう。

本稿においては、月夜野型羽釜の系譜とその成立過程についてはほぼ明らかにすることができたと考えているが、生産と供給の具体的関係については現象面の把握しきれなかった。さらに時間をかけた詳細な胎土観察による生産場所の特定と、窯跡のいっそうの解明を進める必要性を痛感している。また、武蔵型甕の広域流通と月夜野型の狭域流通を対比させることで、その背景を炙り出そうと試みたが、武蔵型甕の大量生産と広域流通も仮説の域を出るものではなく、屋上屋を架す結果となってしまったことは、具体的流通システムの提示ができなかったことと併せて、私の力不足によるものであり今後の課題としておきたい。

本稿をまとめるにあたっては、中沢 悟・綿貫邦男・木津博明・神谷佳明・友廣哲也・高島英之の各氏に多くのご教示をいただいた。末筆ではあるが記して感謝の意を表したい。

本稿は、平成12年度の財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究助成金を受けた研究成果の一部である。

註

- 1) 東毛型羽釜については、(桜岡 1997)において仮称したものである。

実態は判然としませんが、口縁部が内傾し、胴部の張った樽のような器形で、紐づくり成形で胴部外面にヘラ削りを施す基本的に土師器の技法で製作されているものである。東毛地域に出土が目立ち、同地域は須恵器の坏・埴と同形態の土師器が分布する地域であり、こうした土師器生産者によって生産された可能性が高い。

- 2) (木津 1990)によれば、吉井型羽釜の成整形技法には2種あり、一つが紐づくり・轆轤整形・胴下半から底部ヘラ削りで、もう一つは紐づくり・非轆轤整形・胴部撫でまたはヘラ撫でであるとしている。そして前者には還元焰焼成があるが、後者は酸化焰焼成をしているため色調に違いがあるという。また、胎土には共通する要素があるが、系譜の連続性は不明としている。吉井型羽釜2種の前後関係は前者が先行することが予測されるが、後者の羽釜と東毛型羽釜が整形と焼成に共通要素があり、同一のものであるのか、地域差なのか今後確認する必要がある。
- 3) 「武蔵型甕」は、国別タイプの一つとして福田氏によって南武蔵で設定された。設定段階で分布範囲がある程度把握されていたが、「武蔵」という地域名称を使用することでその中心が武蔵にあるような錯覚を覚える。しかし、現状で武蔵型甕の中心地域は北武蔵から上野南部にあることは明らかであり、飯塚恵子氏が『正観寺遺跡群Ⅰ』高崎市教育委員会 1979 で提唱した「上武型」の方が実態を表している。最近では渡辺 一氏も武蔵型甕と北武蔵型坏を合わせて同様の名称を使用している。一時期国別タイプの設定が盛んであったが、設定を急ぐあまり実態把握が曖昧なままに地域名称が冠されてきたと思う。過去に「相模型皿」と呼称されていたものが、現在では「北武蔵型皿」と名称変更されている。この土師器皿も分布の中心は上野南部をも含んでいるのは明らかであり、名称の変更は更なる混乱を招くことになるのではないだろうか。敢えて地域名称を付すならば、武蔵型甕・北武蔵型坏・北武蔵型皿を含めて「上武型」を使用すべきと考えているが、ここでは混乱を避けるためにこれまで同様に武蔵型・北武蔵型を使用した。
- 4) 伊勢崎市波志江中宿遺跡では、4世紀後半の66基の粘土探掘坑が検出されており、調査区外にも探掘跡が想定されている。50cmほどの厚さのある暗色帯が粘土化した部分を探掘していることがわかっており、平均2m×1.5m規模の探掘坑からは1.5㎡の粘土が探掘可能である。これの66倍の粘土から製作可能な土器は、集落単位で必要とする量をはるかに超えており、大量生産したものを広域に流通させていたことが想定できる。この遺跡の至近の光仙房遺跡でも6世紀後半の粘土探掘坑が300基以上も確認されており、この地域が伝統的に土器の大量生産をしていた可能性が高い。
- 5) 武蔵型甕と北武蔵型坏は、セットで生産されたものと考えられ、坏が公式の場での使用が想定されるのに対して、甕は裏方的存在である。

引用・参考文献

- 井上唯雄 1973 『群馬県利根郡月夜野町窯跡発掘調査報告』月夜野町教育委員会
- 大江正行・中沢 悟 1985 「月夜野古窯跡群の成立とその背景」『月夜野古窯跡群』月夜野町教育委員会
- 木津博明 1990 「第6項 吉井型羽釜について」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂井秀弥 1989 「北陸型土師器甕の製作技法」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 1990 「東北古代クロロ土師器の二系譜と須恵器との関係」『新潟考古学談話会会報』第6号 新潟考古学談話会
- 1999 「古代岩船郡域の非クロロ土師器をめぐって」『新潟考古学談話会会報』第20号 新潟考古学談話会
- 1991 「越後魚沼地方の群馬系須恵器」『北陸古代土器研究』創刊号 北陸土器研究会
- 柴原永達男 1972 「奈良時代の流通経済」『史林』第55巻第4号 史学研究会
- 桜岡正信 1990 「クロロ使用酸化焰焼成甕について」『研究紀要』7 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 1991 「7世紀代以降の土師器坏の画期とその要因」『群馬考古学手帳』Vol.2 群馬土器観会

- 1997 「
群馬県埋蔵文化財調査センター
2003 「武蔵型甕について」『高崎市史研究』高崎市史編纂室
笹沢正史 1995 「信・越両地域にまたがるクロロ土師器甕の在り方について」『新潟考古学談話会会報』第15号 新潟考古学談話会
鈴木徳雄 1983 「古代北武蔵における土師器製作手法の画期」『土曜考古』第7号 土曜考古学研究会
田中広明・末木啓介 1997 「中堀遺跡出土の遺物について(3) 供膳具(4)煮炊具」『中堀遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中広明 1986 「上毛野・北武蔵の古墳時代後期の土器生産」『東国土器研究』第2号 東国土器研究会
中沢 悟 1984-1 「月夜野型羽釜について」『埋文月報』No40 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
1984-2 「月夜野窯跡群の概要」『埋文月報』No42 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
1986 「月夜野型羽釜の様相と月夜野古窯跡群」『大原II遺跡村主遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
長谷川厚 1995-1 「東国における七世紀史の意義」『王朝の考古学』大川清博士古希記念会
1995-2 「東国における七世紀への胎動」『古代探叢』IV 早稲田大学出版部
1996-1 「古代前半期における関東地方の煮炊具の様相」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東 煮炊具—』古代の土器研究会
1996-2 「東国における「律令的土器様式」の成立と展開について」『古代探叢』III 早稲田大学出版部
原 雅信・中沢 悟 1982 『藪田東遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
菱田哲郎 1998 「手工業と都市の発達」『古代史の論点3』小学館
福田健司 1978 「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』第64巻第3号 日本考古学会
三浦京子 1990 「第2項 奈良・平安時代の土器」『戸神諏訪遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
山崎義男 1941 「上野国利根郡月夜野二窯趾に就いて」『古代文化』
『金屋遺跡』1985 新潟県教育委員会
『山三賀II遺跡』1989 新潟県教育委員会
「ニッ宮遺跡」『浅川扇状地遺跡群』1992 長野市教育委員会
「牟礼バイパスB・C・D地点」『浅川扇状地遺跡群』1986 長野市教育委員会
『広網遺跡』1985 郡山市教育委員会
『若松城三の丸跡発掘調査報告書』1985 会津若松市教育委員会
『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書IV—下田遺跡・下田谷地遺跡—』1990 秋田県教育委員会
『鹿沼流通業務団地内遺跡』1991 栃木県教育委員会
『大釜遺跡』1983 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『城平遺跡 諏訪遺跡』1984 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『糸井宮前遺跡I』1985 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『藪田遺跡』1985 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『洞I・II・III遺跡』1986 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『後田遺跡II』1988 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『下川田下原遺跡 下川田平井遺跡』1993 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
「白井二位屋遺跡」『白井遺跡群—集落編I—』1994 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『十二原遺跡 大原遺跡 前中原遺跡』1982 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『有馬遺跡I 大久保B遺跡』1989 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『深沢遺跡 前田原遺跡』1987 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『石墨遺跡』2001 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『森下中田遺跡』1998 昭和村教育委員会
『中棚遺跡』1985 昭和村教育委員会
「久保遺跡」『田中II遺跡』「久宮間戸遺跡III」『渋川市内遺跡XII』1999 渋川市教育委員会
『梨の木平遺跡』1977 群馬県教育委員会
『天代瓦窯遺跡』1982 中之条町教育委員会
『五十嵐遺跡(第2次)』『大塚遺跡群』1985 中之条町教育委員会
『倉海戸遺跡発掘調査概報』1984 榛東村教育委員会
『道城遺跡』1998 吉岡町教育委員会
『大久保A遺跡』1986 吉岡町教育委員会
『戸神諏訪III遺跡』1993 沼田市教育委員会
『戸神諏訪遺跡V』1995 沼田市教育委員会
『町田上原遺跡 岡谷十二遺跡 岡谷西原遺跡』1996 沼田市教育委員会
『町田手古又遺跡 岡谷毛勝遺跡』1997 沼田市教育委員会
『赤坂遺跡』『沼田西部地区遺跡群II』1992 沼田市教育委員会
『稻荷遺跡』1993 沼田市埋蔵文化財発掘調査団
『大竹遺跡』「高平遺跡」『関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書』1985 月夜野町遺跡調査会
「北貝戸遺跡」『関越自動車道(新潟線)水上町埋蔵文化財発掘調査報告書』1985 水上町遺跡調査会
『北原遺跡』1986 群馬町教育委員会
『堤上遺跡』1994 群馬町教育委員会